

# 介護支援専門員法定研修の自己評価と他者評価の比較

— 専門研修課程Ⅰ受講前と受講後の評価から見てきたこと —

檜 木 博 之

## 1. はじめに

介護支援専門員が継続的に業務を行うためには、5年毎に資格を更新するための研修を受講しなければならない。資格を更新するための研修は、介護保険制度に位置付けられた法定研修となる。この法定研修、専門研修課程Ⅰと専門研修課程Ⅱの2つに分けられている。専門研修課程Ⅰは、介護支援専門員として実務に従事していて就業後6か月以上の者を対象としている。専門研修課程Ⅱは、介護支援専門員として実務に従事していて専門研修課程Ⅰを修了している就業後3年以上の者が対象となっている。

2017年には、法定研修の内容が修正され、これまでの講義中心から体験しながら学んでいく演習の時間を多く取り入れることになった。また、研修内容の変更だけでなく、研修評価を導入することにもなった。介護支援専門員研修ガイドライン（以下ガイドライン）の中で研修評価について「専門職として修得すべき知識、技術を確認するため、各研修修了時に修了評価を実施」<sup>1)</sup> するとしている。ガイドラインでは、研修評価を行う者として、研修実施機関、講師、受講者、事業者管理者がそれぞれ行うことになっている。受講者と事業者管理者の評価では、受講に当たっての目標設定を共に行うことになっている。受講者は受講する前に目標を設定することで、研修で学ぶべきことを明確にすることができる。一方、事業者管理者は研修の受講に期待することを明らかにすることになっている。

介護支援専門員の法定研修における評価としては、檜木（2020）が、A県で実施した専門研修課程Ⅰの事例科目の受講前・受講直後、3か月後の自己評価結果を分析し、全ての項目で受講前より受講直後、そして更に3か月後の自己評価のほうが、平均値が高かったことを明らかにしている。「この結果を受けて研修効果があった、とまでは言い切れない。この場合、自己評価だけでなく他者評価と併せて行うことが必要になってくる」<sup>2)</sup> として、自己評価のみで研修評価を行うことの限界を指摘している。

自己評価と他者評価の関係について、遠藤（2005）は、「他者評価によって自己評価が吟味にかけられることで、さらに上質の自己評価が望めるのです。妥当な他者評価なしに健全な自己評価は実現しません」<sup>3)</sup> とし、両方の評価の必要性を明らかにしている。

看護師では齊田・阿蘇品（2007）が、自己評価と他者評価を行う意義として、「より客観的なデータが得られ、違いを分析することで、例えば自己評価が他者評価より低い場合は自信を持たせるように指導するなどのように今後の教育に対する示唆を得ることができる」<sup>4)</sup>としている。しかし介護支援専門員の法定研修においては、自己評価と他者評価を比較し、今後の研修に繋げていくまでには至っていない。

本論では、A県で2019年度に実施された介護支援専門員専門研修課程Ⅰの受講前・3か月後の自己評価及び事業者管理者の他者評価を比較し、今後の介護支援専門員の法定研修に繋げていくことを目的としている。

## 2. 研究方法

A県において2019年度に行われた専門研修課程Ⅰを受講した237名を対象に受講前・3か月後の研修に関する自己評価を実施した。また受講者が勤務している事業者管理者に対しても、受講前・3か月後の他者評価を実施した。評価項目は、受講者の受講前目標として「研修後にどのような行動ができるようになりたいかを記載してください」、3か月後では「目標の達成と実践への活用の状況の自己評価を記載してください」とした。事業者管理者の受講前として「受講者に研修で学んでほしいこと・期待することを記載してください」とし、3か月後では「目標の達成と実践への活用の状況の評価を記載してください」とした。どちらも自由記載となっている。受講者237名に対して235名（回収率99.2%）、管理者237名に対し233名（98.3%）から回答があった。

分析方法は、自由記述として回答された意見を受講前・3か月後にそれぞれ分けてテキストマイニングを行い、出現頻度の多い単語（名詞）を抽出、共起ネットワークを活用し分析を行った。テキストマイニングはKH Corderを使用した。

倫理的配慮として、研修受講者・事業者管理者に本研究の趣旨を文書及び口頭にて説明し、回答することで同意を得たこととした。また、本論をまとめるにあたり個人が特定しないよう配慮している。本論は、研修実施機関であるA県介護支援専門員協会（以下県協会）と共同で実施し、結果について本紀要に投稿することについて県協会の承諾を得ている。

## 3. 研究結果

### 3.1. 受講者による受講前自己評価

受講者による受講前の自己評価「研修後にどのような行動ができるようになりたいか」では、以下の抽出語（名詞）の出現回数が多かった。抽出語（名詞）の出現回数を多い順に10個を挙げると【表1】のとおりである。「利用者」139回、「家族」99回、「連携」81回、「知識」80回、「支援」75回、「アセスメント」69回、「サービス」63回、ケアマネジメント60回、

研修54回、作成51回であった。

【表1】受講者による受講前自己評価の抽出語出現回数

	抽出語	出現回数
1	利用者	139回
2	家族	99回
3	連携	81回
4	知識	80回
5	支援	75回
6	アセスメント	69回
7	サービス	63回
8	ケアマネジメント	60回
9	研修	54回
10	作成	51回

一番多かった「利用者」の意見をいくつか記載内容のとおり紹介する。「利用者の真のニーズを的確に把握し、多様な社会資源に繋げることができるケアマネジャーになること」「利用者や家族の気持ちをケアプランに反映できるよう掘り下げられるような面談をしていく」「利用者を取り巻く背景を理解し、ケアプランに反映したい」「アセスメントスキルを向上させ、利用者と向き合ったケアマネジメントを行いたい」「利用者の生活の質が向上するように、課題分析ができるようになる」等があった。

2番目の「家族」の意見として、「利用者本人と家族の思いを理解し、家族関係に配慮した利用者支援ができる」「本人や家族の意向を踏まえ、すり合わせが必要な部分を上手くケアプランに反映できるようになりたい」「もう少し積極的に本人や家族と関わりを持って、少しでも変化に気づき、行動できるようになりたい」「利用者や家族と信頼関係、話しやすい関係を築くために意識すべき行動やコミュニケーション技術の習得」「疾患が本人、家族に与える影響を考え、その人らしい生き方ができるように支援する」等があった。

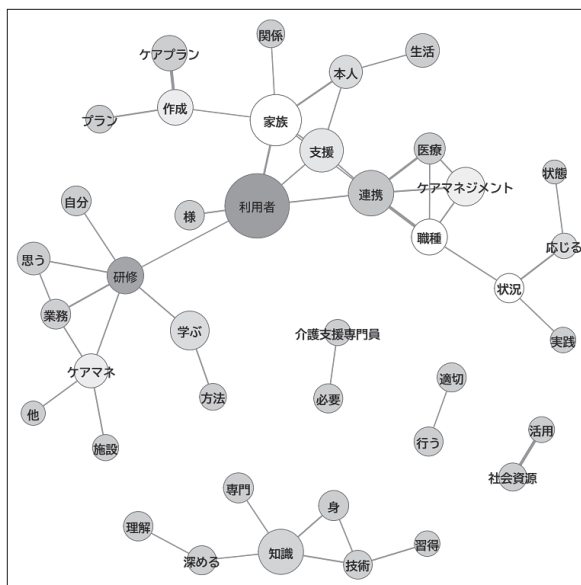
3番目の「連携」の意見として、「多職種との連携を深めることと、多くの社会資源を活用したケアマネジメントができるようになりたい」「特に苦手な分野である医療との連携や社会資源の活用を勉強して活かしていきたい」「支援する事業者間の連携がスムーズにいくよう、調整役として機能するようになりたい」「医療との連携等、多職種連携による適切なケアマネジメントを行うことができる」「苦手とする多職種連携方法について学ぶことや、社会資源・地域への視野を広げる力を学び、可能な限り在宅での生活が送れるようにする」等があった。

4番目の「知識」の意見として、「医療知識や法律の知識を深めて複雑な社会問題にも対応できるようになりたい」「より個別的なケアプランが作れるようになるための土台となる基礎的な知識を習得する」「幅広い専門知識を持ち、地域包括ケアに向けて様々な社会資源を活用したケアマネジメントができるようになりたい」「介護支援専門員としての知識と相談援助技術を身につけ、利用者に安心してもらい、自分にも自信を持ちたい」「アセスメント力を高め、様々なケースを担当することで幅広い知識を得て、適切な支援ができるようになりたい」等があった。

5番目の「支援」の意見として、「利用者本人と家族の思いを理解し、家族関係に配慮した利用者支援ができる」「介護支援専門員として利用者を支援していく上で必要な知識や面接時の技術の向上を研修によって磨く」「ケアマネジメントのプロセスとしてのいろいろな考え方を学び、自立支援につながる個別支援ができるようになりたい」「主訴を理解してアセスメントを行い、支援に必要な社会資源の提案ができる」「介護保険サービスのみならず、社会資源、インフォーマルにも目を向けた支援、プランニングができるようになる」等があった。

受講者による受講前の自己評価を共起ネットワークにしたものが【図1】になる。頻出の抽出後である「利用者」と「家族」の2語は、強く繋がっていた。また「利用者」「家族」は「連携」「支援」とも繋がっていた。「知識」については、頻出の抽出語との繋がりはないが、「専門」「技術」「深める」などと繋がりがあった。

【図1】受講者による受講前評価の共起ネットワーク



### 3.2. 事業者管理者による受講前他者評価

事業者管理者による受講前の他者評価「受講者に研修で学んでほしいこと・期待すること」では、以下の抽出語（名詞）の出現回数が多かった。抽出語（名詞）の出現回数を多い順に10個を挙げると【表2】のとおりである。「研修」と「利用者」が93回、「支援」69回、「連携」68回、「家族」65回、「ケアマネ」63回、「期待」61回、「知識」60回、「地域」57回、「ケアマネジメント」56回であった。

【表2】事業者管理者による受講前評価の抽出語出現回数

	抽出語	出現回数
1	研修	93回
1	利用者	93回
3	支援	69回
4	連携	68回
5	家族	65回
6	ケアマネ	63回
7	期待	61回
8	知識	60回
9	地域	57回
10	ケアマネジメント	56回

1番多かった「研修」の意見として「研修をとおして業務の自己点検をして、自らの課題を確認し修正することを望む」「研修をとおして施設の中だけでは得られない外部の情報や、他施設の対応を知り、業務に活かしてほしい」「介護支援専門員として求められる必要な知識技術を習得できるよう、研修参加者からも様々な情報や意見を交換し知見を広げて今後の業務に役立ててほしい」「丁寧な支援を行っているので、研修では今までの実践を振り返りながらさらに専門知識・技術を習得できるよう学んできてほしい」「諸制度を理解し、医療など多職種との連携についても学び自立支援を意識して研修に参加してほしい」等があった。

同様に1番多かった「利用者」の意見として「介護保険の知識について理解を深め、利用者の自立支援に向けてのケアができ、より良いケアマネジメントの実践力をつけてほしい」「施設ケアマネだからこそ、利用者との関わりが持てそれをプランへ活かせるようになってほしい」「看取りや入退院時の医療との連携等、医療度の必要性の高い利用者への対応について学んでほしい」「利用者のストレングスに目を向け、自立性を高められるようなアセスメント

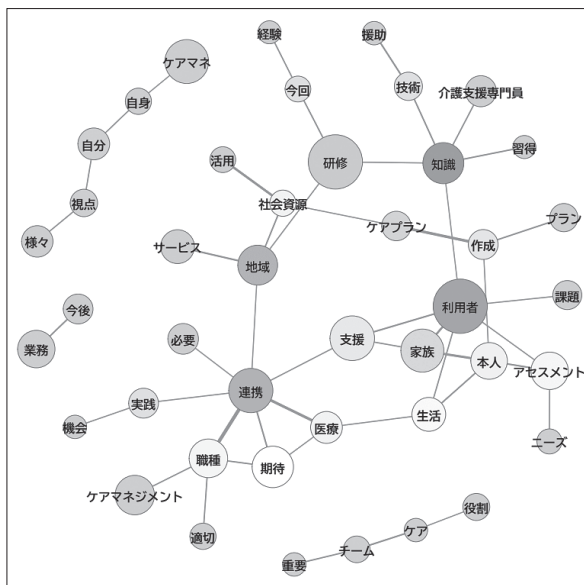
力を身につけてほしい」「多様な状況、状態にある利用者の支援ができるように様々な知識を深めてケアマネジメントに活かしてほしい」等があった。

3番目の「支援」の意見として「利用者の潜在的な課題を受けとめ意向を大切にし、真のニーズを支援できるように学んでほしい」「自分だけの考えや視点、サービスにとらわれすぎず、家族を含むチーム支援を意識してできるようになることを期待する」「ケアマネとしての倫理やプロセスを理解し、その人らしい生活をおくるためにどう支援をすればよいか考える力をつけてほしい」「地域の関係者との協力で支援が成り立つ方法を見いだせる視点を学んでほしい」「利用者や家族の要望を適切に把握し、支援をしていただきたい」等があった。

4番目の「連携」の意見として「医療や専門職との連携方法や知識を学び、チームケアの実践ができるようになってほしい」「多職種との連携、地域との関わり方など研修を受けることで理解を深めてほしい」「医療と介護が連携して不安のない在宅生活をおくれるような提案ができることを期待する」「関係機関と質の高い連携を図るためのフォーマル・インフォーマルな社会資源の把握や整理」「社会資源の具体的な活用例や医療との連携方法をより深く習得することを期待する」等があった。

5番目の「家族」の意見として「対人援助技術のスキルを磨いて利用者や家族を支援できるようになってほしい」「本人、家族と信頼関係を築きながらニーズを導き出し、具体的な生活目標、個別プランが作成できる」「本人、家族にもう一步踏み込んだ聞き取りや目の前のこ

【図2】事業者管理者による受講前評価の共起ネットワーク



とだけでなく、視野を広げたケアマネジメントを学んでほしい」「利用者や家族の要望を適切に把握し支援していただきたい」「家族と施設との信頼の絆をつなぐ技術、コミュニケーション能力を学んでほしい」等があった。

事業者管理者による受講前の評価を共起ネットワークにしたものが【図2】になる。1番の頻出単語であった「研修」と「利用者」にそれぞれ頻出単語が繋がっていた。「研修」では「知識」「地域」が、「利用者」では「支援」と「家族」が繋がっていた。「利用者」と「家族」は強い繋がりがみられた。「連携」では、「医療」や「職種」だけではなく、頻出単語であった「期待」とも繋がっていた。

### 3.3. 受講者による3か月後評価

受講者による3か月後の自己評価「目標の達成と実践への活用の状況の自己評価」では、以下の抽出語の出現回数が多かった。抽出語の出現回数を多い順に10個を挙げると【表3】のとおりである。「研修」が130回、「利用者」124回、「意識」97回、「家族」85回、「アセスメント」83回、「連携」75回、「支援」72回、「本人」70回、「サービス」69回、「情報」68回であった。

【表3】受講者による3か月後自己評価の抽出語出現回数

	抽出語	出現回数
1	研修	130回
2	利用者	124回
3	意識	97回
4	家族	85回
5	アセスメント	83回
6	連携	75回
7	支援	72回
8	本人	70回
9	サービス	69回
10	情報	68回

1番多かった「研修」の意見として「医療の知識が浅く調べて終わることが多かったが、研修後は積極的に受診に同行するようになった」「研修を受ける前はあまりよく理解できなかった社会資源の活用方法、医師や関連する業種との連携の必要性などを学び、少しずつだが自信がついた」「研修で、課題分析を的確に行うために、アセスメントが重要であることを

学び、今までの生活、今後どのような生活を望んでいるのかを理解するようになった」「研修全体を通して、ICFの視点を学ぶ機会であった」「研修にて実務を振り返りながら再確認することで、理解を深めることができた」等があった。

2番目の「利用者」の意見として「研修で学んだICFに基づいたアセスメントの活用で、利用者・家族が真に望む生活を理解する力は、以前に比べて向上してきていると感じる」「アセスメント力はまだまだ未熟だが、利用者の強みや可能性、できることを意識するようになり、多少は個別性のあるケアプラン作りができるようになった」「インテークの重要性や家族とのやりとりを密にすることで、利用者を取り巻く資源を活用したり、新たな課題に対する支援の幅が広がったりした」「利用者のケアプラン作成にあたり、受講中に学んだアセスメント技法を生かし、ICFの視点でその人の強みを生かした自立支援型のケアプランの作成が少しずつできるようになってきている」「アセスメントでは、利用者や家族の表面だけの言葉ではなく、内側の気持ちを汲みとっていくように意識できるようになった」等があった。

3番目の「意識」の意見として「自分の課題が分かり、3か月間意識を持ち続けることはできたが、全ての利用者について実践できておらず十分ではない」「ICFの視点を意識してアセスメントを行うように努めている」「対人個別援助技術で学んだ『非言語コミュニケーション』『双方向』『面接技術』を意識して活用している」「多職種との連携を意識して取り組むことや、入居者、家族に必要なケアマネジメントを実施することを心掛けている」「専門職への苦手意識が減り、新たな問題が発生した時にはサービス担当者会議を開催し、本人・家族・関係者でチームを形成することができるようになった」等があった。

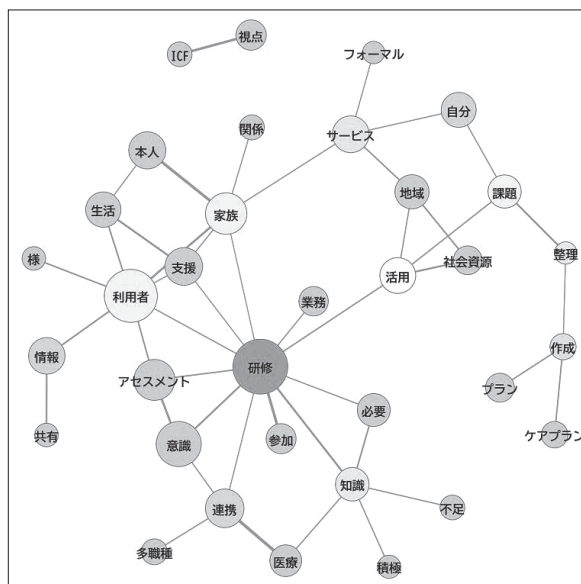
4番目の「家族」の意見として「地域で利用者を見ていく方法についての意義や手法を学べたことで、家族をはじめとするインフォーマルサービスを必要な部分にあて、地域で不足しているサービスについては必要なことを声に出していくことを学べた」「人を理解することの難しさを学び、利用者や家族を理解していないことがわかった」「サービス先行ではなく、本人・家族の課題やニーズが課題整理総括票を用いて活用ができるようになってきた」「研修を行ったことでケアマネだけでもいろいろな視点があることが痛感できたため、家族の意向にも沿いつつ利用者の意向も家族に伝えていくことを意識して行うようになっている」「サービス担当者会議や家族への説明等の伝達や話の抜け方、まとめ方等まだまだ力不足であり、これからは勉強していく必要性を感じる」等があった。

5番目の「アセスメント」の意見として「表出されている訴えだけでなく、生活全般をアセスメントし潜在的なニーズの把握を行うようにしている」「受講前に比べバリエーションの法則を意識しアセスメントするようになっているが、アセスメント能力の向上は今後もまだまだ課題であると感じている」「全体像を把握するためにはICFの視点が大切で、意識しながらアセスメントを行っている」「研修で学んだICFを意識して行えるようになってきたが、



具体的にプランに落とし込むことができたのは少数」「利用者を取り巻く環境にも目を向けてアセスメントを行うよう心掛けている」等があった。

【図3】受講者による3か月後評価の共起ネットワーク



受講者による3か月後の自己評価を共起ネットワークにしたものが【図3】になる。

1番の頻出単語であった「研修」には、「意識」「連携」「アセスメント」等と繋がっていた。2番目の頻出単語である「利用者」は「家族」「支援」「アセスメント」「情報」等と繋がっていた。「研修」は「意識」と、「利用者」は「家族」と、それぞれ繋がりが強かった。

### 3.4. 事業者管理者による3か月後評価

事業者管理者による3か月後の他者評価「目標の達成と実践への活用の状況の評価」では、以下の抽出語の出現回数が多かった。抽出語の出現回数を多い順に10個を挙げると【表4】のとおりである。「利用者」107回、「研修」100回、「地域」71回、「支援」68回、「家族」65回、「連携」65回、「アセスメント」48回、「情報」45回、「事業」44回、「知識」44回であった。

1番多かった「利用者」の意見として「今まで気づけなかった利用者の思いや自身の支援に新たな気づきが出るようになっている」「主治医をはじめサービス事業所、薬局、インフォーマルなサービスと積極的に連携を図り、利用者を支えることができています」「研修終了後、実

【表4】事業者管理者による3か月後評価の抽出語出現回数

	抽出語	出現回数
1	利用者	107回
2	研修	100回
3	地域	71回
4	支援	68回
5	家族	65回
5	連携	65回
7	アセスメント	48回
8	情報	45回
9	事業	44回
9	知識	44回

務では積極的に他事業所と情報交換を行い、利用者にとってより良い環境や目標達成に向けてチームアプローチをしていく姿勢がよりみられるようになってきている」「研修で学習したICFを取り入れ課題分析を行うことで、利用者に寄り添ったケアプランの作成や社会資源の活用ができることを今後も期待している」「研修以前は他のケアマネや多職種への情報収集に対して遠慮しているような様子が見られたが、研修後は家族のために積極的に情報収集を行う姿勢が見られている」等があった。

2番目の「研修」の意見として「他事業所のケアマネとの交流を通し、本人、家族の意向を踏まえた上で積極的に多職種の意見を取り入れながら業務を行っており、今回の研修が大きな成長をもたらしていると感じている」「研修受講前と受講後では事業所内の伝達会議など、担当ケース以外の話し合いの際に受講前と比べ多角的にケースを眺めることができおり、確実な視点の広がりを感じる」「研修参加後、特に担当医や事業所との連携場面では連携ツールをうまく活用されている」「研修終了後、実務では積極的に他事業所と情報交換を行い、利用者にとってより良い環境や目標達成に向けてチームアプローチしていく姿勢がみられるようになってきている」「専門研修に参加し、様々な地域のケアマネジャーと研修を共にする中で、サービスの地域格差を感じたことと思うが、それを補って余りある社会資源の重要性にも気づくことのきっかけになった」等があった。

3番目の「地域」の意見として「インフォーマルの活用、地域とのつながりの必要性について理解を深められた様子」「今後は地域課題を見つけ自分たちが地域資源となれるような活動をしてほしい」「介護保険の枠にとらわれることなく、個人と地域双方の課題を見据えつつ

クライアントの心情に配慮した心豊かな支援を実践できる成長ぶりが伺えている」「インフォーマルなサービスを開発するよう、地域包括支援センターを介して地域に働きかけている」「地域包括ケアシステムを意識しながら、地域活動やインフォーマルを積極的に活用できる意識と利用者や家族へのアプローチができる」とよい」等があった。

4番目の「支援」の意見として「今まで気づけなかった利用者の思いや自身の支援に新たな気づきが出るようになっていく」「他職種の業務内容を理解し多職種連携した支援への取り組みへの努力を評価する」「受講後より癌末期、生活保護、難病などの事例を担当し、確実に支援の幅を広げている」「常に疑問に思ったことは曖昧にせず、振り返りを行う姿勢は次の支援につながっており、今後更に事例を通して地域社会へと視野を広げ、状況に応じた支援が行なえるものと期待している」「研修後は、自分の課題を少しずつクリアしていき、引き出しも広げながらケースに取り組む姿勢が見られ、利用者支援にも活かされていたのではないかとと思われる」等があった。

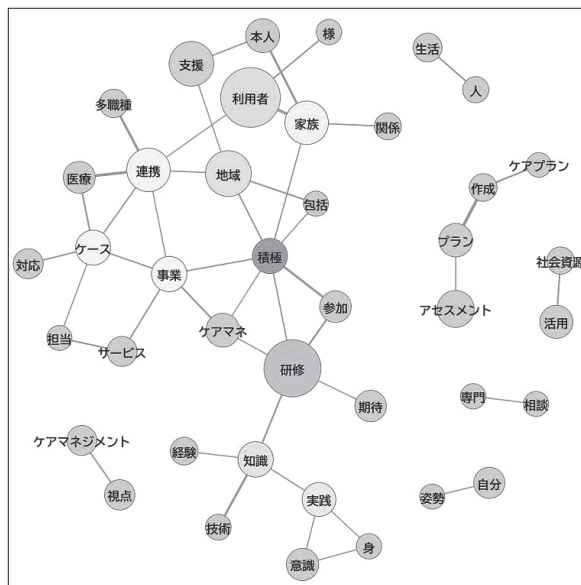
5番目の「家族」の意見として「本人の情報を収集する時に意識的に家族関係も含め多面的に情報を集めるようにしていることがうかがえる」「情報の整理をしながらわからないことはそのままにせず、電話や次の訪問時に確認するなど一連の流れをしっかりと自分で判断し、本人、家族のニーズをより引き出せるようになったと感じる」「退院時支援など、医療連携をすすめるためには、医療の基礎知識を身につけ、必要な情報を入手するなど、利用者や家族の代弁者的役割を推進してほしい」「今回の研修で、アセスメント力が向上し、計画書の内容もより充実したものになっていて、家族との関係性もより良いものになっている」「家族支援については、家族とコミュニケーションを図れて関係性を保っている印象」等があった。

同じく5番目の「連携」の意見として「他職種との連携も密になり、幅広い視野を持ち、サービス提供に繋げることができている」「他職種の業務内容を理解し、多職種連携した支援への取り組みの努力を評価する」「地域包括支援センター職員として、地区社協や民生委員、シニアクラブ等様々な地域団体と十分に連携し、企画等の遂行を主体的に行うことができている」「困難事例に対して、一人で抱え込まずに周囲の機関とよく連携することができている」「受講後、医療連携など多職種との連携は積極的に行なえ利用者へ寄り添う支援ができつつある」等があった。

事業者管理者による3か月後の評価を共起ネットワークにしたものが【図4】になる。

1番の頻出単語であった「利用者」とは「家族」と強く繋がり、また「連携」とも繋がっていた。周囲には「地域」「支援」等があった。2番目の「研修」では「知識」「期待」等が繋がっていた。

【図4】事業者管理者による3か月後評価の共起ネットワーク



#### 4. 考察

研修前と3か月後の受講者自己評価と管理者の他者評価を比較すると、以下のことにまとめられる。

- ①「利用者」と「家族」への意識が受講者、管理者どちらも高い。
- ②「地域」について管理者は意識しているが、受講者の意識は少ない。
- ③受講者は研修終了後、研修で学んだことを意識して実践している。
- ④管理者は3か月後の受講生の変化を評価している。
- ⑤3か月後評価を行うことで研修と実践を振り返る内省に繋がっている。

①「利用者」と「家族」への意識がどちらも高いことについては、受講者と管理者ともに共通している結果だった。但し、受講者は「利用者」と「家族」を一括りとして意識している傾向がみられたが、管理者のほうが「利用者」とは別に「家族」に対してのアプローチも意識している傾向があった。このことから受講者と管理者とのケアマネジメント実践での視点のズレがあると考えられる。

②「地域」について、管理者は受講前と3か月後の両方において頻出単語として出てくるが、受講者は受講前27回、3か月後60回と、少ない結果であった。受講者は管理者よりも「地域」を意識していない、といえる。しかし、受講者も3か月後には「地域」の頻出回数が増えていることから、研修をとって介護支援専門員が「地域」を意識して実践するようになった。

てきている、とも考えられる。

③受講者は研修終了後、研修を意識して実践を行うことができていることについては、「意識」が頻出単語であがっていること、また、受講者の3か月後自己評価の中で、研修で学んだICF等を意識して実践していることの記載が多くみられたことから考えられる。研修をとおして自身の課題が明確になり、そのことを意識して取り組んでいる記載も多くみられた。これらのことから受講者は、研修で学んだことを意識して実践を行っていることが考えられる。

④管理者は3か月後、受講者の変化を評価していることについては、管理者の3か月後評価において受講者の実践を振り返り、変化やできていることを明確にしている記載が多くみられた。一方で、実践する上での受講者への課題についての記載もみられた。管理者が研修後の受講者の実践を振り返り、介護支援専門員として必要な実践能力を評価する機会になっている。

⑤3か月後評価を行うことで研修と実践を振り返る内省に繋がっていることについては、受講者と管理者両方に言えることである。③と④で指摘したように、研修終了3か月後に自己評価と他者評価を行うことで、研修で学んだことを踏まえて実践を振り返る機会になっていると言える。研修を受講して終了するのではなく、その後の実践にどう繋がっているのかを評価していく意義は大きいと言える。厚生労働省老健局振興課（2015）は法定研修の修了評価の意味として「各研修の内容を理解し、専門職として修得しておくべき知識が到達目標に達しているかどうかの確認を図ること」<sup>5)</sup>としている。

受講者の自己評価と管理者の他者評価を比較して、研修をとおして日々の実践を振り返る機会になっていること、そして受講者と管理者との評価する上での視点のズレがあることが明らかとなった。法定研修としてはあくまでも介護支援専門員としての実践能力という到達度評価が求められるが、自己評価と他者評価を比較することでプロセス評価も可能となってくる。この評価を活かした事業所内でのスーパービジョン体制があると、更に受講者自身の課題を明確にし、介護支援専門員の質の向上に繋がってくると考えられる。

一方で、介護支援専門員としての到達度評価としては、本論で行っている評価としては不十分である。介護支援専門員としての実践能力を自己評価、他者評価できる統一した指標のもと、法定研修を行うことが今後の課題になってくると考えている。

## 註

- 1) 厚生労働省（2016, 1）参照。
- 2) 檜木博之（2020, 72）参照。
- 3) 遠藤貴弘（2005, 61）参照。

(44) 介護支援専門員法定研修の自己評価と他者評価の比較（橋本博之）

4) 齊田菜穂子・阿蘇品スミ子（2007, 14）参照。

5) 厚生労働省老健局振興課（2015, 54）参照。

#### 〈参考文献〉

遠藤貴弘（2005）「子どもの自己評価」田中耕治編『よくわかる教育評価 第2版』ミネルヴァ書房

厚生労働省（2016）「介護支援専門員専門研修ガイドライン」（[https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisaku\\_jouhou-12300000-Roukenkyoku/2016.11SENMONKENSHUGAIDORAIN\\_3.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisaku_jouhou-12300000-Roukenkyoku/2016.11SENMONKENSHUGAIDORAIN_3.pdf)）

厚生労働省老健局振興課（2015）「仕事に役立つ！実務解説 介護支援専門員研修制度を平成28年度から見直し」『月刊介護保険』No. 233

齊田菜穂子・阿蘇品スミ子（2007）「新卒看護師が就職後1年間で獲得した看護実践能力」『九州看護福祉大学紀要』Vol. 10, No. 1

橋本博之（2020）「介護支援専門員専門研修Ⅰ課程の事例科目における自己評価から見えてきた課題」『静岡福祉大学紀要』Vo. 116

〈キーワード〉 介護支援専門員法定研修、自己評価、他者評価